世界一の舌を持つ男

稲葉ほうき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界一の舌を持つ男

【Ｎコード】
Ｎ７８５３Ｅ

【作者名】
稲葉ほうき

【あらすじ】
ある日、町に奇妙な男がやって来た。頭のてっぺんからつま先まで、全身ピンク色の格好をした男で、自称『世界一の舌を持つ男』と名乗っている。果たして、男の正体とは・・・。

世界一の舌を持つ男がおりました。

ある日、町に奇妙な男がやって来ました。ピンクの帽子を頭にのせて、ピンクの上着とズボンに身を包み、ピカピカに磨き上げられたピンクの靴を履いた、頭の先からつま先まで全身ピンク色の男でした。大きくて頑丈そうな旅行カバンを持ち、指にはキラキラ光るルビーの指輪をはめていました。

奇妙な男は町の中でも人通りの多い場所にやってくると、持ってきた旅行カバンを地面に置き、中からコップと数種類の水差しを取り出して並べ始めました。そしておもむろに、通りかかる人々にこう呼び掛けたのでした。

「さぁさぁ、世にも不思議な現象をお見せしよう。何を隠そう私こそは世界一の舌を持つ男。目隠しをしたまま、この魔法の舌だけを使って、ここにある数種類の液体が何であるか、たちどころに当てて見せよう！」

町行く人々はこの奇妙な男の姿に一瞬、好奇の眼を向けるのですが、頭のおかしい変人だと思い、そのまま通り過ぎて行くばかりでした。そこで更に男が続けてこう叫ぶのでした。

「どなたか私と賭けをしないか！賭けに参加するには賭け金を払ってもらうのが条件だが、もしも私が1度でも間違った答えを出した時には、この指にはめているルビーの指輪を差し上げよう。もちろん賭け金も全額お返しする。どうだろう、悪い条件じゃないと思うが。」

この言葉を聞きつけ、次第に男の周りには人だかりが出来るように

なりました。すると、その人だかりを掻き分けて一人の若者が男の前に立ち、こう尋ねました。
「今までお前が言っていたことは全て本当だろうな？賭けに勝てば、そのルビーの指輪が貰えるのだな。」
「間違いありません。賭けに勝つ事が出来れば賭け金はもちろん、このルビーの指輪も差し上げます。」
「よし分かった。その前にコップと水差しの中身を確認させてもらう。何か仕掛けがしてあるかもしれないからな。」
「どうぞご自由に。では、私が目隠しをするために使うこの黒い布も一緒に確認してみてください。確認が終わりましたら私に目隠しをして、どれでも好きな水差しからコップに注いでください。」
そう言って、男は液体の入った水差しを指し示し、黒い布を若者に手渡しました。若者は全ての品々を念入りに確認した上で、男の指示に従いコップを手渡したのでした。

黒い布で目隠しをされた男は、コップに口をつけて一気に飲み干しました。そして、目隠しを外した男は全ての水差しの中身を確認して、一つの水差しを指し示したのでした。男が指し示した水差しは、まさに若者が選んだものと同じでした。

「いかさまだ。きっと何か仕掛けがあるに違いない。」
それを聞いて男は静かにこう答えました。
「分かりました。初めての挑戦でしたので、今回はサービスとさせて頂きます。もう一度挑戦してみてください。」

男の指に輝くルビーの指輪がどうしても欲しかった若者は、一つの方法を思いついたのでした。水差し以外の液体であれば、相手がどんな仕掛けを施していても絶対に分かるはずはないと。そこで若者は、男の用意した水差しには手をつけず、近くの井戸から水を汲んできてコップに注ぐ事にしたのでした。

黒い布で目隠しをされた男は、コップに入った液体を飲み干しました。そして目隠しを外すと表情一つ変えずにこう答えました。
「これは先ほど、この近くの井戸から汲んできた水ですね。」
自分のインチキを見破られた若者は、焦ってこう答えたのでした。
「世界一の舌を持っていなくたって、水なら子供にだって分かるさ。しかも、この辺りで水が手に入る場所と言えば近くにある井戸しかない。だから当たったのさ！みんなもそう思うだろ？」
周りにいた人々も、若者の言葉に手を叩いて賛成したのでした。その様子を見た男は、相変わらず表情一つ変えずにこう答えるのでした。
「そこまで言うのであればこうしましょう。どんな物でも良いので、あなたが選んだ液体を持って来てください。正解でしたら私の勝ち。不正解でしたらあなたの勝ち。これで文句はありませんよね？」
「よし。絶対にお前に分からないような液体を準備してくるから、そこで待っていろよ！」
若者はそう告げると、急いで駆け出していきました。最初は単なる野次馬として集まっていた周りの人々も、この意外な展開に若者が帰って来るのを今か今かと待つことにしたのでした。

しばらくして、コップを持った若者が戻って来ました。若者からコップを手渡された男は、口をつけて一気に飲み干したのでした。
「ほう、これは珍しい。１００年前に作られた幻の赤ワインですね。」
勝敗は若者の表情を見ただけで一目瞭然でした。若者は約束どおり賭け金を支払うと、無言のままこの場を立ち去っていったのでした。
この様子を見ていた周囲の人々は、途端に大騒ぎを始めました。

そんな周囲の騒ぎが聞こえないかのように、男がおもむろに口を開きました。

「さて、皆様。他にもまだ私に挑戦したいと思われる方がおられるかもしれませんが、残念ながら日も暮れてきました。“我こそは！”と思われる方は、今日と同じ時刻にこの場所にお集まりください。」

そう言うと、並べられた水差しとコップを旅行カバンに詰め込み、何処かに立ち去っていったのでした。

次の日。町の人々は一晩かけて考え出した思い思いの液体を携えて、昨日と同じ時刻、同じ場所に集まったのでした。しかし、例のピンク色の男は見当たらず、壁に貼り付けられた一枚の紙には、ただこう記してあったのでした。

『親愛なる、そして無能な町の皆様方へ！！

まず初めにお断りしておきますが、“世界一の舌を持つ男”と言う言葉に、一切の偽りは御座いません。しかし、舌というのは何も味を感じるだけの器官ではないのですよ。こんな場所に突っ立っていないで、念入りに自分達の家の中をご確認された方が賢明ですよ。何しろ私こそは“世界一の舌を持つ男”。私にとって無能な皆様方をしばらくの間足止めする事くらい、造作も無い事でしたので。

そうそう。この文章を読まれている頃には、私と私の仲間は皆様方の手の届くところから遠く離れた場所におります。くれぐれも「全身ピンク色の男を見なかったか？」なんてお尋ねになりませんように。何処を捜してもお探しの男は、決して見つかりませんので。』

（後書き）

小さい頃”泥棒”が登場する児童文学が好きだったので、大人になったら自分もそんな作品を書きたいなぁと思っていました。そんな思いがあったせいか、”ペテン師”が登場する作品が完成しました。いつの日か、ちゃんと”泥棒”が登場するお話を書けたら良いのですが・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7853e/

世界一の舌を持つ男

2010年12月11日02時45分発行